釣れ釣れなるままに

１９９７年思い出の釣行記 PART.　1

あるはずの岩はそこにはない

鹿島釣狂

釣遊会第２回大会

☆開 催 日	平成９年５月１１日		
☆開催場所	寿都港～千走港		
☆入釣場所	豊浜大岩場		
☆釣　　果	アブラコ	４００ ㎜	２
	カジカ	３８０ ㎜	１／２
	ホッケ		１２
	タコ	２ 杯	
	重量	３１２ ０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１０９２ 点	
	成績	準優勝	

意を新たに

鹿島に転勤して１年が過ぎた。朝にタベに鹿島の街に響き渡る「埴生の宿」のメロディー、それは鹿島小学校から流れ来るチャイムの音色である。これももう聞くことは無くなった。

かつて、炭鉱街として２４時間１・２・３番方と休むことなく不夜城のように輝き、人口２万有余人を数えた大夕張鹿島。石炭産業の盛衰とともに歩んで来た街は、日進月歩の進展を続ける社会情勢の中、エネルギー革命の嵐をまともに受け、街は衰退の一途を辿る。その上、昨年６月、シユーパロダムのかさ上げ建設に伴う地域住民と開発局の調印式が行われ、鹿島地区はシユーパロ湖の底に沈むことになり、今、その地名までもが無くなろうとしている。

私の職場は山奥の大変小さなものであり、住民の移転とともに縮小され、私のいる場所がなくなり、急遽転勤が決まった。最後の後始末の一翼をこの私が担いたいと考えていたのだが、これも上司の命により致し方のないことである。

転勤先は岩見沢と命じられた。これで単身赴任の不自由な生活ともお別れすることになる。たった１年ではあったが、赴任した当時のつらい思い出はすっかり消え、独身のような気楽な生活ともおさらばするのかと思うと妙にさみしいものが込み上げてくる。夕張岳の麓に広がる鹿島の自然もいい。職場もこじんまりしていて温かい寡囲気に包まれ居心地がよかった。やる気のある同僚に囲まれ仕事も精一杯できた。何より上司の励ましに助けられた。地域の人達も温かく接してくれた。いよいよいざ去る事になると万感胸に迫るものがある。こんな職場にも地域にも未練はあるが、仕事における悔いはない。

新しい赴任地は石狩平野のど真ん中、岩見沢市幌向である。職場の窓から見える造成地には真新しい住宅が次々と建ち、地域に活気が漲っている。札幌市のベットタウンとしての新興住宅地にある大きな職場への転勤で戸惑いもあるが、職責を果たすために新たな奮闘を決意している。

鹿島釣狂

昨年度は釣遵会の７回の例会全て参加することができた。年間でも６位に入賞することができ大変誉れに思っている。年間優勝者は嵐氏であった。

今年度は、何度例会に参加できるであろうか。第１回大会は転勤後の業務に忙殺されるとともに新しい職場への気兼ねもあり出席できなかった。自重したわけである。もちろん、誰から言われたわけでもないが、仕事を投げ出してまでの横柄な心を私は持ち合わせてはいない。

職場で仕事に追いかけられているある日、電話が鳴った。「鹿島釣狂さんですか。私の職場で釣り大会があるのですが参加しませんか。」

「鹿島釣狂」と言われてドキッとする。職務上の立場もあり、煩わしさもあるので「北海道のつり」への投稿は偽名を使わせていただいている。「釣狂」を知る人間は釣遊会のメンバーの一部だけである。さらに幌向に転勤になったことなど誰にも知らせていない。しかし、知っている者は何処かにいるものである。投稿に使った写真がよくない。やはりモザイクをかけてもらっておくべきであったか。その後職場への来訪者からも、出張先の会議の中でも「釣狂」の名前が出て来て「北海道のつり」の読者層の広いのに感心し、その対応に辟易した。大会へのお誘いは丁重にお断り申し上げた。

第２回大会（5月１１日　寿都港～千走港）

あるはずの岩がそこにはない

入釣場所は下調べする時間も無く、昨年と同じ豊浜大岩場に入ることにする。今年は大会への満足な参加が望めないこともあり一発大物ねらいで行くことにする。今回も清田氏と同伴である。なんだか氏と同じ釣り場に入ることが多い。多分氏の釣りの好みと一緒なのだろう。年配者であるので大変勉強にもなっている。清田氏は大会の下見でこの岩場に入り、まずまずの釣果を納めたということである。私も昨年同じ場所で６位に入賞している。

現地到着。清田氏と共に豊浜郵便局前で降ろしてもらう。今年は岩場の先端まで躊躇する事なく進むことができた。昨年私が入った場所には清田氏が入り、私はさらにその前の離れ岩に乗ることにする。

岩の手間が深く抉れており、その渡りに難儀したが何とか道具一式を運ぶことができた。準備をすべて終わり、最後のエサを取りに行く途中、何も荷物をもたない空身で軽く飛んだまではよかったが、勢い余ってさらに先の１０㎝ばかりの海水の下の岩の上をトットットッと進んでしまった。海水の下にまだ続くはずの岩がそこには無かった。足は全く届かず、首までドブンと海水に漫かってしまった。あわてて這い上がったが胴長靴には海水がどっさりと侵入してしまった。ああ・・・！　これから帰りのバスが迎えに来るまでこの始末をどうしたらよいものだろう。５月とはいえまだまだ朝夕は冷え込む。幸いにもこの

日は風もなく気温もまずまずで何とか持ちこたえることが出来るであろうか？　歩く度に靴底からはグチョグチョといういやな音を発してくるが、これにも耐えなければならない。

２杯の大ダコとの大格闘

兎にも角にも今年初めての第１投を離れ岩前にちょい投げする。遅ればせながら、１年の安全と好釣を祈り、ベストの左胸に詰め込んだウイスキーのボトルからの滴を海に捧げる。ついでにこれからの寒さ対策にゴクツと喉元に流し込む。

すぐに海からの便りである。ガタガタと大きく竿を揺らして小さなカジカが上がってきた。まずは今年の第１号にウイスキーをゴクツとやる。狭い岩場ではあるが竿３本とも遠・中・近と振り込み、もう１度ゴクツとやる。今度は遠投した竿にクンクンとしたアタリがあり、かわいいアブラコが上がってきた。ウイスキーをチビリ。続けて、中投した竿にもゴツンとした大アタリ。４０㎝近いカジカが上がる。ウイスキーをゴクリ。

左に中投した竿がジワーツと絞り込まれる。左へ左へと竿先が移動する。「タコだ！」　軍手をはき、竿を思いっきり煽る。じわじわと寄って来る。渡った離れ岩との溝の所まで寄せるが、その溝を川のように海水が流れ、海水の流れに合わせて大ダコが右に左にと漂っている。時折、シユーツ、シユーツと水を吐きながら８本の足を海水に叩きつけ、岩に向かって泳ぐ。岩に張り付かれては取り込みが不可能となる。ただ事でない出来事に清田氏が気づき、向こう岸からタコを引っ張り上げてくれる。潮が満ちてきたこともあり、今度は渡りに気をつけて清田氏に近づく。

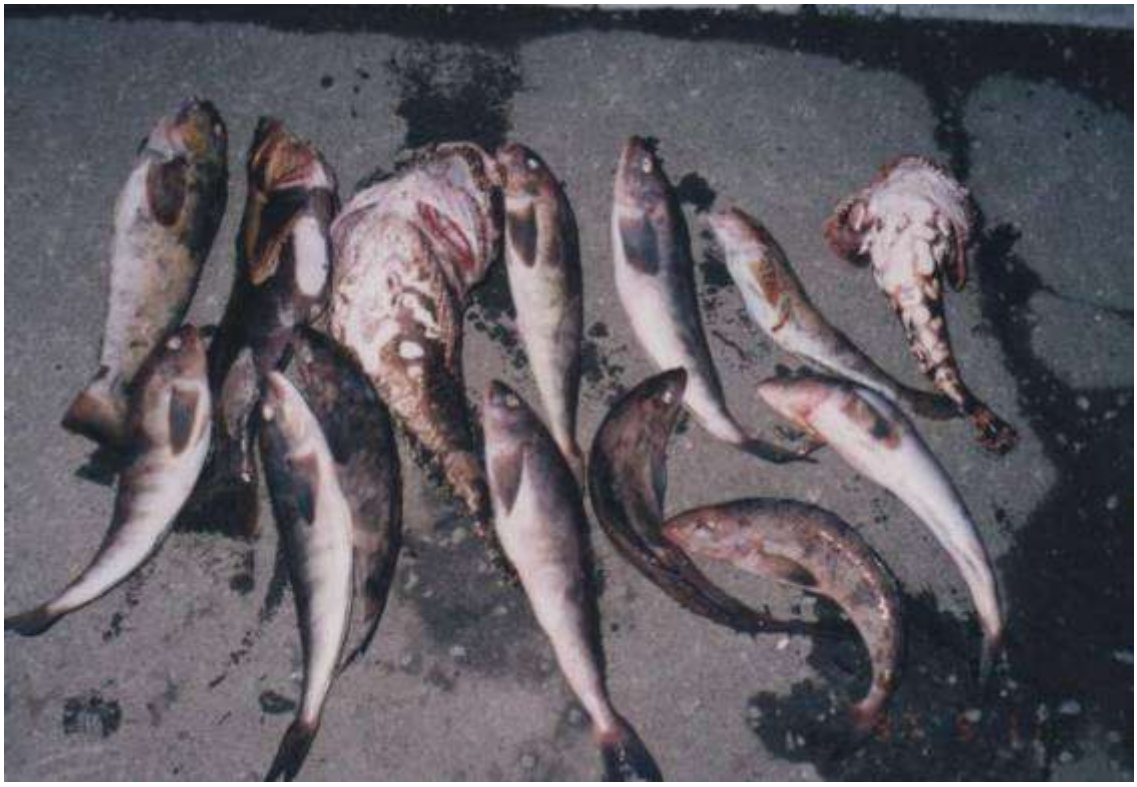
何と！　タコが２杯もついている！　大ぶりのタコの横に足を２本ほど食いちぎられたタコがついている。タコとタコとの格闘の間に私の仕掛けがすっぽりと入ったものか？　それとも、中ダコを食事中の大グコが欲たけて、私の仕掛けについたイカゴロやカツオに食らいついてきたものかどうかは定かでないが、一挙に２杯とはこれまた驚きである。アルコールは苦手な清田氏に大きい方の足を２本進呈し、私はウイスキーをゴクゴク、ゴックンとやる。体が　カーツと温かくなり、胴長靴の中の海水も抜けてきているようである。

本命そして準優勝

潮が満ちてきたこともあり、離れ岩を撤退する。周りも明るくなってきたので今度はアブラコねらいに切り替える。ポツンポツンとホッケが上がる。浮子釣りをしている釣り人

が見事な竿さばきで次から次へとホッケを上げている。清田氏は良型の黒がしらを３匹ほど上げた。カレイ仕掛けに取り替えようか？　いやいや今年は大物ねらいと決めたはずだぞ！　６時頃、ようやく右の昆布根に打ち込んだ竿からアブラコ独特の快い当たり。３５㎝程のものが上がってきた。

しばらく当たりのないまま時が過ぎて行く。出岬の右の昆布根はあきらめて左の溝に沿った沖に黒々とした昆布根が見える。少し距離はあるが１本針で遠投しておく。退屈してきたこともありホッケねらいで浮子釣りの用意をしていると、ガタンと音がする。振り向くと今にも竿が海の中に引きずり込まれそうになり、リールが三脚に引っ掛かっている。昆布根を切るため、腰をためて思いっきり竿を煽る。ゴツンゴツシと頭を振り、深み目指して突き刺さるアブラコ独特の引き込みである。上がってきたのは４０㎝を越える本命である。更に同じところに遠投を試みるがその後は音沙汰のないまま締め切り時間が来た。



審査の結果、私は１０９２点で準優勝であった。優勝は１２６８点の嵐氏。３位は１０７２点の荻野氏であった。

タコは、快く送り出してくれた新任地の上司へのお土産とした。８本の足が４本になっているのはそのためである。近所の同僚にもホッケやアブラコ、カジカをもって行く。次の日、冷凍にしたタコの足を職場にもって行き、何人かの同僚に賞味していただくことになる。何せ、タコは２杯である。格闘に敗れて失った足２本を除いても足はしめて１４本もある。

次回の６月１日の大会は、職場の行事と重なり参加できないことが確定している。第４

回大会はどうであろう？襟裳岬での大物との戦いを夢見ているのだが・・・・。